

魏における五言詩流行の要因について

矢 田 博 士

一、序

漢魏西晉期の贈答詩を例に、詩形別の詩作状況を調べてみると、漢代では四言が主流であるが、魏では五言が主流となり、それが西晉期に入ると再び四言が主流となる、といった變遷が確認される。筆者はこれまで西晉期における四言詩の盛行について、その要因を考えてきた⁽²⁾。しかし、このような贈答詩における詩作状況の變遷から見た場合、漢代の詩歌創作のありようと西晉期のそれとが、繼承關係という点においては、自然の流れとして結びつくのではないか、逆に「贈答」の詩を含めて、あらゆる分野の詩が主として五言で作られるといった魏における詩歌創作のありようの方が、むしろ異様なのではないか、と思うに至った。

そこで本稿では、なにゆえ魏において五言詩が流行したのか、その要因について改めて考えてみたいと思う。

二、四言と五言の特徴

まず初めに、「四言」と「五言」が備え持つ性質・特徴を確認しておきたい。

「四言」は、儒教の經典の一つである『詩經』に由来し、それゆえに傳統性を有した典雅さを備えた詩形であると言えよう。しかも、朗讀するに當たり、句末に休音のない二拍子の均質なリズムは、安定感・重厚さを感じさせる。しかし一方で、平板さ・單調さを免れないというマイナス要素をも合わせ持っている。このような特徴から、典雅さが求められる分野の詩、例えば「宮廷雅樂」「應詔・應令」「侍宴」などの

詩、あるいは儒教を信奉する士人間でやりとりされる「贈答」の詩を作るにあたっては、よりふさわしい詩形であると考えられる。しかし一方で、平板・單調で面白みに缺けるためであろう、次第に創作の對象としては顧みられなくなり、六朝の後半期においては、ほとんど作られなくなる。

それに對して、「五言」は、漢代の民間歌謠に由來し、それゆえに四言に比べれば大衆的・通俗的な詩形であると言えよう。しかし、句末に一字分の休音がある三拍子のリズムは、變化に富み齒切れが良く、創作の對象としては、平板・單調な四言よりも魅力的な詩形であると言える。さらに五言の場合、四言よりも一字分多いことよって、作者の心情や意圖を盛り込みやすいという利點が考えられる。要するに、五言詩は四言詩よりも、面白みがあるうえに、作りやすい詩形であると言つてよいだろう。六朝の後半期において五言が完全に四言を凌駕し、詩歌創作の主流となつた主たる要因もまた、この點にこそ求められるであろう。⁽³⁾

三、漢魏西晉期の贈答詩における詩形別の詩作狀況

では次に、漢魏西晉期の贈答詩における詩形別の詩作狀況

について、確認してみたい。

《漢代の贈答詩》

現存するものは、以下の通りである。なお、王粲は一般に「建安の七子」の一人として知られるが、その贈答詩については、おおむね曹操に歸順する前の作であることから、漢代に分類した。また、蘇武と李陵の贈答詩については、實際に彼らが作ったものではないとするのがほぼ定説となつて⁽⁴⁾いることから、ここでは對象からはずすことにした。⁽⁵⁾

朱穆 「與劉伯宗絕交詩」 四言

桓麟 「答客詩」 四言

秦嘉 「贈婦詩」 四言

「贈婦詩三首」

四言

「答婦詩」

五言

徐淑 「答秦嘉詩」

楚歌

蔡邕 「答對元式詩」

四言

「答卜元嗣詩」

四言

王粲 「贈蔡子篤詩」

四言

「贈士孫文始」

四言

「贈文叔良二首」

四言

「贈楊德祖」

四言

秦嘉と徐淑との夫婦間での贈答詩に四言以外の詩形が見られるのは、全て四言の作であることが確認される。なお、青山剛一郎氏は、秦嘉と徐淑の贈答詩については、使用されている語彙の面から、西晉期の作の可能性が高いと指摘する⁽⁶⁾。だとすれば、現存する漢代の贈答詩は、全て四言の作ということになる。現存数は少ないとはいえ、以上のことから、漢代では士人間で詩のやりとりを行う場合は、四言で行うのが慣例であったと判断されるのである。

《魏の贈答詩》

現存するものは、以下の二十九例⁽⁷⁾。そのうちの二十二例を五言詩が占める。明らかに漢代とは異なる詩作状況が確認されるであろう⁽⁸⁾。

劉楨「贈五官中郎將詩四首」	五言
「贈徐幹詩二首」	五言
「贈從弟詩三首」	五言
徐幹「贈五官中郎將詩」	四言
「答劉楨詩」	五言
曹植「贈徐幹詩」	五言
「贈丁儀詩」	五言
「贈王粲詩」	五言

魏における五言詩流行の要因について(矢田)

「贈丁儀王粲詩」	五言
「贈丁翼詩」	五言
「贈白馬王彪詩七首」	五言
曹彪「答東阿詩」	五言
繁欽「贈梅公明詩」	四言
邯鄲淳「贈吳處玄詩」	四言
杜摯「贈毋丘儉詩」	五言
「贈毋丘荊州詩」	五言
毋丘儉「答杜摯詩」	五言
郭遐周「贈嵇康詩三首」	五言
郭遐叔「贈嵇康詩四章」	四言
「贈嵇康詩」	五言
阮侃「答嵇康詩二首」	五言
嵇康「贈兄秀才入軍十八章」	四言
「贈秀才詩」	五言
「答二郭詩」	五言
「與阮德如詩」	五言
嵇喜「答嵇康詩」	四言
「答嵇康詩三首」	五言
江偉「答賀蜡詩」	四言

「答軍司馬詩」

五言

《西晉期の贈答詩》

全部で一一一例が現存し、そのうちの六十五例が四言で、四十六例が五言である。五言詩が四割を占めてはいるが、魏末の三例と陸機・陸雲の入洛前の三例を除く四十例のうちの少なくとも三十例は惠帝期に入ってからとの作と判断され、したがって武帝期に限るならば、四言贈答詩の比率は、漢代と同様に、極めて高いものとなる。⁽⁹⁾すなわち、西晉に入り、漢代の慣例が復活したかのような現象が見られるのである。しかも、西晉期の四言贈答詩は、單に四言で作られるという點で、漢代のそれと類似するのみならず、内容面や表現面においても、以下の例の通り、極めて類似しているのである。

贈蔡子篤詩 王粲

翼翼飛鸞 翼翼たり 飛鸞

載飛載東 載ち飛び 載ち東す

我友云徂 我が友 云に徂き

言戾舊邦 言に舊邦に戻らんとす

……

……

……

及子同寮 子と寮を同じくし

生死固之 生死 之れを固くせん

何以贈行 何を以ってか行くに贈らん

言賦新詩 言に新詩を賦す

……

……

贈陸機出爲吳王郎中令詩六章 潘尼

崑山何有 崑山 何をか有る

有瑤有珉 瑤有り 珉有り

及爾同僚 爾と僚を同じくし

具惟近臣 具に惟れ近臣たり

……

……

(第三章)

昔子忝私 昔 子 私を忝くし

貽我蕙蘭 我れに蕙蘭を貽る

今子徂東 今 子 東に徂くに

何以贈旃 何を以ってか旃に贈らん

……

……

(第六章)

王粲の詩は、ともに荊州に難を避けていた蔡睦(字は子篤)が故郷に歸ることになった折りの作。一方の潘尼の詩は、愍

懐太子府の同僚であった陸機が吳王郎中令に轉出となった折りの作である。兩者の内容面および表現面の類似性は一目瞭然であろう。また、このように漢代と西晉期の四言贈答詩の類似性が確認されることによって、魏における贈答詩の詩作状況の異様さが益々際だってくるのである。

以上、漢魏西晉期における贈答詩の詩作状況を整理すると、以下の通りとなるであろう。

① 漢代においては士人間の詩の贈答は四言で行うのが慣例であったと考えられる。

② ところが、魏においてはその慣例が破られ、他の分野の詩と同様、贈答の詩においても主として五言によって作られるようになった。

③ それが西晉初期の武帝期になると、漢代の慣例が復活し、贈答詩が主として四言で作られるようになった。

四、魏における五言詩流行の要因

では、なぜ魏においては、四言での創作を慣例としていた「贈答」を含め、あらゆる分野の詩が主として五言で作られるようになったのであろうか。本稿ではその要因として、以下の三點を指摘してみたい。

魏における五言詩流行の要因について（矢田）

(i) 君主権力側にある人たちの詩歌への愛好。

(ii) 倡家の出身である十夫人の影響。

(iii) 曹操の政策としての「文學の宣傳」による影響。

【(i) 君主権力側にある人たちの詩歌への愛好】

魏においては、曹操をはじめ君主権力側にある人物自らが詩歌創作の實踐者であった。

曹操は、詩歌に對して極めて高い關心を示していたようで、それは王沈の『魏書』(『三國志』卷一「魏書・武帝紀」の裴松之注、所引)の以下の記述からも窺えるであろう。

登高必賦、及造新詩、被之管弦、皆成樂章。

〔高きに登れば必ず賦し、新詩を造るに及びては、之れを管弦に被らしめ、皆な樂章と成る。〕

曹操の詩歌は、二十首あまりが現存し、そのすべてが「樂府」である。四言や雜言のものも見られるが、五言句を基調としたものが多く、さらに「薤露行」「蒿里行」「苦寒行」「却東西門行」など、五言の齊言の作も存在する。

文帝・曹丕の詩歌は、「樂府」が二十五首、「徒詩」が二十

首ほど現存する。「樂府」の方には四言や雜言のものも見られるが、「徒詩」についていえば、その約七割が五言の齊言詩である。

明帝・曹叡の詩歌は、二十首ほど現存し、いずれも「樂府」である。そのうちの半数が五言の齊言の作である。

また、曹丕が即位して以降、君主權力の側からは疎外されることになるが、魏の皇族である曹植もまた、この時代を代表する五言詩の作者として名高い。

以上のように、彼らは、自らもまた詩歌創作の實踐者であったことから、五言詩の魅力についても、十分に實感できたものと思われる。それはともかく、魏においては、皇帝や皇族など、權力側にある者が率先して五言詩を創作した。そしてそのことが、當時における五言詩流行の要因の一つになったことは、ほぼ間違いないであろう。ちなみに、西晋の皇帝や皇族で、詩歌の創作に關心を示した者は、全くといってよいほどおらず、彼らの作とされる詩歌は、『晉書』卷一「宣帝紀」に載せる司馬懿の四言詩一首のほかは、見あたらない。

【(ii) 倡家の出身である卞夫人の影響】

自らの作った詩を樂曲に合わせ歌うことを好んだ曹操の傍

らには、常に「倡優」と稱される者たちが侍っていたと言う。『三國志』卷一「魏書・武帝紀」の裴松之の注に引く『曹瞞傳』に以下のようにある。

好音樂、倡優在側、常以日達夕。

〔音樂を好み、倡優 側らに在り、常に日を以って夕に達す。〕

「倡優」とは、樂人や俳優のこと。以下の記述から、自ら積極的に天子や諸侯や權勢のある家に取り入り、その宴席などで歌舞音曲や藝當を披露することによって生計を立てていた、おそらくは家族を中心に構成されていた職能的藝人集團のようなものであったと推測される。¹⁰⁾

中山地薄人衆。……多美物、爲倡優。女子則鼓鳴瑟、跕履、游媚貴富、入後宮、徧諸侯。

〔中山 地は薄く人は衆し。……美物多く、倡優と爲る。女子は則ち鳴瑟を鼓し、履を跕はき、遊びて貴富に媚び、後宮に入り、諸侯に徧し。〕／『史記』卷一二九「貨殖列傳」

李延年、中山人、身及父母兄弟、皆故倡也。

〔李延年、中山の人、身及び父母兄弟、皆な故と倡なり。

／『漢書』卷九十三「佞幸傳」〕

そして、曹操の夫人で曹丕と曹植の母にあたる卞氏もまた、倡家の出身であった。『三國志』卷五「魏書・后妃傳」に以下のように言う。

武宣卞皇后、瑯邪開陽人、文帝母也。本倡家。年二十、太祖於譙納后爲妾。

〔武宣卞皇后は、瑯邪開陽の人、文帝の母なり。本と倡家なり。年二十にして、太祖 譙に於いて后に納れ妾と爲す。〕

では、「五言」の詩と「倡家」との間にはどのような関係があるのだろうか。その点について、西晉・摯虞は『文章流別論』の中で、以下の通り、「五言」は「俳諧倡樂」が多く用いた詩形であると指摘する。

古之詩有三言・四言・五言・六言・七言・九言。……

魏における五言詩流行の要因について（矢田）

五言者、「誰謂雀無角、何以穿我屋」之屬是也。於俳諧倡樂多用之。……

〔古の詩に三言・四言・五言・六言・七言・九言有り。……五言なる者は、「誰か謂はん 雀に角無しと、何を以ってか我が屋を穿つ」の屬 是れなり。俳諧倡樂に於いて多く之れを用ふ。……〕

確かに、「倡家」出身の李延年在が、前漢の武帝に妹の李夫人を進めるにあたって歌った歌（『漢書』卷九十七上「外戚傳」）もまた、五言を基調としていた。

北方有佳人	北方に佳人有り
絕世而獨立	絶世にして獨立す
一顧傾人城	一顧すれば人の城を傾け
再顧傾人國	再顧すれば人の國を傾く
寧不知	寧くんぞ知らざらん
傾城與傾國	傾城と傾國とを
佳人難再得	佳人は再びは得ること難し

また、五言三十句から成る樂府古辭「相逢行」（『樂府詩集』）

卷三十四「相和歌辭・清調曲」には、權勢の家の宴席に侍る「邯鄲の倡」が描かれている。

黄金爲君門 黄金もて君が門と爲し

白玉爲君堂 白玉もて君が堂と爲す

堂上置樽酒 堂上 樽酒を置き

作使邯鄲倡 邯鄲の倡を作使す

倡家が權勢の家の宴席で歌舞を披露し、出席者の耳目を樂しませていたことについては、例えば『後漢書』の以下の記述からも確認できる。

豪人之室、……妖童美妾、填乎綺室、倡謳伎樂、列乎深堂。

「豪人の室、……妖童美妾、綺室を填め、倡謳伎樂、深堂に列なる。」／『後漢書』卷四十九「仲長統傳」

融外戚豪家、多列女倡、歌舞於前。

「融は外戚豪家にして、多く女倡を列ね、前に歌舞せしむ。」／『後漢書』卷六十四「盧植傳」

おそらく、權勢の家の宴席では、そこに侍る倡家によって「相逢行」のような五言の詩が多く歌われたものと推測されるのである。

さらに、『文選』卷二十九に「古詩十九首」として收められている漢代の五言詩には、以下のような「倡家の女」を主人公としたものも見られる⁽¹⁾。

昔爲倡家女 昔は倡家の女たり

今爲蕩子婦 今は蕩子の婦と爲る

蕩子行不歸 蕩子 行きて歸らず

空牀難獨守 空牀 獨り守ること難し(其二)

このように五言詩の背後には「倡家」の影が見え隠れしていることが確認されるであろう。はたして、摯虞の指摘する通り、五言が「俳諧倡樂」と稱される者たちによって、多く用いられていたとすれば、「倡家」出身の卞夫人もまた、當然、五言を用いて詩を作り、あるいは歌っていたであろうし、さらには夫の曹操および息子の曹丕・曹植の詩作活動にも、當然、影響を及ぼしていたであろう。いずれにしろ、魏における五言詩流行の要因を考えるにあたっては、少なくとも卞

夫人をはじめ「倡家」という存在に對する考察が不可缺であると思われるのである。⁽¹²⁾

【(iii) 曹操の政策としての「文學の宣揚」による影響】

建安五年（二〇〇）に官渡の戦いで袁紹を破り、さらに建安十年に袁譚を討つて華北を平定した曹操は、袁氏の居城であった鄴に自らの據點を移した。この頃より曹操の幕下には多くの文人が集まり、曹操・曹丕・曹植を中心に文學活動が盛んに行われるようになった。『三國志』卷二十一「魏書・王粲傳」に以下のようにある。

始文帝爲五官將、及平原侯植皆好文學。粲與北海徐幹
字偉長・廣陵陳琳字孔璋・陳留阮瑀字元瑜・汝南應瑒
字德璉・東平劉楨字公幹、竝見友善。

〔始め文帝 五官將と爲り、平原侯の植と皆な文學を好む。粲と北海の徐幹 字は偉長・廣陵の陳琳 字は孔璋・陳留の阮瑀 字は元瑜・汝南の應瑒 字は德璉・東平の劉楨 字は公幹と、竝びに友善せらる。〕

曹操が自らの幕下に文人たちを積極的に招き入れたことに

魏における五言詩流行の要因について（矢田）

ついて、渡邊義浩氏はそこに曹操の政治的な意圖を見る。⁽¹³⁾

曹操は、袁氏を打倒する以前においては、自らの勢力基盤を築くため、荀彧など名士の協力を必要としたが、袁氏を打倒し勢力基盤を築いて以後は、曹魏政權の君主權力の確立を目指し、名士との對立色を深めていった。具體的には、名士たちの「名聲主義」による人事に對抗して、「唯才主義」による人事を行い、さらには儒教に基づく名士たちの文化的價值に對抗するため、それに代わる新たな文化的價值として「文學」を政治的に宣揚したのだ、と指摘する。曹操は、建安十六年（二一七）に「五官將文學」という「文學」を冠する官職を新たに創設するが、渡邊氏はそれを、「文學」を制度化するための措置であったとし、さらには後に激化する崔琰・毛玠・徐奕・何夔・邢顛などの名士と丁儀との對立に着目し、それを儒教的價值基準を掲げる名士層が掌握する丞相東曹操の人事權に對抗して、丞相西曹操であった丁儀が曹操の「文學」宣揚を背景に「文學」的價值を基準とした人事を推進し、儒教的價值に對する優越性を示そうとした、いわゆる人事權をめぐる抗争であったと指摘する。渡邊氏の見解は、曹操と名士層との関わり方や名士間における地縁・血縁・官職面での結びつきなどについて、史料や先行諸説を綿密に検討した

うえて導き出されたものであるだけに、極めて説得力の高いものだと言えよう。

曹操の幕下に多くの文人が集まり、曹操・曹丕・曹植を中心としたいわゆる建安文壇において文學活動が盛んに行われた背景に、曹操による政策としての「文學」の宣揚があったとすれば、建安文壇において五言が詩歌創作の主流となった現象もまた、當然その影響によるものといふことにならう。⁽¹⁶⁾

はたしてそうであるとすれば、なぜ四言詩ではなく、五言詩であったのか。そもそも四言詩は、儒教の經典の一つである『詩經』に由来するものであり、名士たちの文化的價值に合致するものと言つてよい。漢代において、士人間の贈答詩が四言を慣例としていた要因も、主にこの點にこそ求められよう。一方、五言詩は民間の歌曲に由来し、その擔い手として俳諧倡優の存在が確認されることについては、前述した通りである。俳諧倡優は、その技藝によって爲政者に媚び入り、爲政者を奢侈に導き政治を怠らせる弊害要因ともなりうることから、孔子をはじめ儒教理念に基づく政治を志向する者にとっては、はなはだ蔑むべき存在として意識されていた。

『史記』卷四十七「孔子世家」に以下のようにある。

齊有司趨而進曰、「請奏宮中之樂」。景公曰「諾」。優倡侏儒爲戲而前。孔子趨而進、歷階而登、不盡一等、曰「匹夫而營惑諸侯者當誅。請命有司」。有司加法焉、手足異處。

〔齊の有司 趨りて進みて曰はく、「宮中の樂を奏せんことを請ふ」と。景公 曰はく「諾」と。優倡侏儒 戲れを爲して前む。孔子 趨りて進み、階を歴て登り、一等を盡くさずして、曰はく「匹夫にして諸侯を營惑する者 當に誅すべし。請ふ 有司に命ぜんことを」と。有司 法を加へ、手足 處を異にす。〕

齊の景公と魯の定公が夾谷で會見した折りのこと。齊の側が齊の宮中で演奏されている樂曲を披露しようとしたところ、優倡侏儒が戯れながら進み出てきた。それを見た孔子は、諸侯を惑わし政治を亂すとの理由から、それらの者を誅殺するよう求めたといふのである。⁽¹⁶⁾

既成の價值基準に對抗しそれを相對化するには、できるだけそれとは異質の價值基準、さらに言えば、それとは對極にある價值基準を提示するのが最も効果的であろう。曹操による「文學の宣揚」が新たな文化的價值を示すことによつて、

儒教に基づく名士たちの文化的價值に對抗し、それを相對化することにあったとすれば、名士たちにとって否定的な存在であった俳諧倡優と關わりの深い五言詩は、その意味ではまさに都合のよい詩形であったと言えるのではないだろうか。

五、結語

漢代においては、士人間の詩の贈答は四言で行われるのが慣例であった。ところが魏においてはその慣例が破られ、贈答詩においてもまた、他の分野の詩と同様、主として五言で作られるようになった。こうした魏における五言詩流行の要因として、本稿では、以下の三點を指摘した。

(i) 君主權力側にある人たちの詩歌への愛好。

(ii) 倡家の出身である卞夫人の影響。

(iii) 曹操の政策としての「文學の宣揚」による影響。

あるいはこれ以外の要因も考えられるかもしれないが、ひとまずは以上の三點を主な要因と見てよいのではないかと考へる。はたしてそうであるとすれば、これらの要因はいずれも極めて魏に特有のものだと言えるであろう。

一方、吳や蜀においては詩作活動が振るわなかったのか、現存の作品は極めて少ない。ただ、もしかりに詩作活動が行

われていたとしても、おそらくは漢代と同様に、依然として四言を主としたものであったと推測される。ちなみに、遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局）には、吳の文人の詩が八例收められているが、そのうちの六例が四言であることから^⑮、そのように判斷してよいのではないかと思われる。以上の推測の通りだとすれば、三國時代における五言詩の流行は、やはり魏のみに特有の要因による、魏に限られた極めて特異な現象であったということになるであろう。

ところで曹丕が魏の初代皇帝として即位して以降、魏においても詩作活動は建安期に比べて振るわなくなる。その原因としては、建安文壇の主要メンバーの死去、曹丕と曹植との相續争いなどが考えられよう。曹丕と曹植の相續争いについて、渡邊義浩氏はそれを、「文學」を價值基準とした人事を進める丁儀が推す曹植と、儒教的價值を擁護するため長子相續を主張する名士が推す曹丕との争いと捉える。一時は文學の才能に優れる曹植を太子にと考えた曹操であったが、建安二十二年（二一七）、結局のところ曹丕を太子とする。こうして名士層の支持を得て曹植との相續争いに勝利を収めた曹丕は、曹操の死後、儒教理念に基づく禪讓により帝位につく。そして即位後ただちに曹植を支持した丁儀・丁廙を殺害

する。渡邊氏は、丁儀・丁廙など文學の士に對する肅清に、曹魏政權における「文學」の宣揚の終焉を見る⁽²⁰⁾。

儒教理念に基づく禪讓によって帝位についた曹丕は、それ以降、名士との協調關係によって、政治を行っていくことになる⁽²¹⁾。しかし、詩作面においては、建安期に比べて振るわなくなつたとは言え、例えば曹植の「贈白馬王彪詩」などの例に見られるように、依然として贈答詩が五言で作られるなど、漢代のありように戻るまでには至らなかつたようである。その理由としては、以下の點が考えられよう。

① 曹丕をはじめ魏の君主は、政治面では名士層に妥協を余儀なくしたものの、曹操が掲げた「文學」という文化的價值を完全に否定するところまでは、名士層に對して妥協しなかつた、と考えられること。

② 名士の方も政治面において一定の影響力を保ち得たことから、詩作面にまで口出しをすることはなかつたのではないか、と考えられること。

いずれにしろ、士人間の贈答詩は四言を基本とするといった漢代の慣例が復活するには、名士出身の司馬氏の政權、すなわち西晉の到來を待たなければならなかつたのである。

【注】

(1) 本稿で言う「魏」とは、曹操の幕下でいわゆる建安文壇の活動が盛んであつた時期を含む。

(2) 拙論「西晉期における《四言詩》盛行の要因について——「應詔・應令」及び「贈答」の詩を中心に——」（『中國詩文論叢』第十四集、中國詩文研究會、一九九五年）など。拙論「傅咸の四言贈答詩について」（『中國詩文論叢』第二十四集、中國詩文研究會、二〇〇五年）の【注】（一）を参照。

(3) 四言詩と五言詩のリズム、およびその盛衰については、松浦友久著『中國詩歌原論』（大修館書店、一九八六年）第二部（五、詩とリズム）、「中國古典詩のリズム——リズムの根源性と詩型の變遷——」を参照。

(4) 「贈蔡子篤詩」「贈士孫文始」「贈文叔良二首」は、王粲が荊州の劉表の許に身を寄せていた時期の作（『文選』卷二十三、参照）。「贈楊德祖」詩の創作時期については明らかではないが、伊藤正文論文「王粲傳論」（『建安詩人とその傳統』創文社、二〇〇二年、所收）は、王粲と楊脩（字は德祖）とが交友關係を結んだ時期を、中平六年頃と推定する。おそらく「贈楊德祖」詩もまた、曹操に歸順する以前の作の可能性が高いと思われる。

(5) 詳しくは、鈴木修次著『漢魏詩の研究』（大修館書店、一九六七年）の第二章「樂府・古歌・古詩考」第四項「古歌・古詩考」「四 傳蘇武・李陵詩考」を参照。

- (6) 第七回六朝學術學會大會における口頭発表「西晉における秦嘉・徐淑の贈答詩」(二〇〇三年十一月二日、於斯文會館講堂)。なお、龜山朗論文「秦嘉「贈答詩」の漢代詩としての新しさ」(『高知大國文』第十九號、一九八八年)は、秦嘉・徐淑の贈答詩をひとまず漢代の作として、その新しさを探ろうとしたものであるが、その詩の特異さから、後世の假託である可能性についても、注意が拂われている。
- (7) ここでは、詩題ごとに一つの作品として数えている。例えば「贈徐幹詩二首」とあれば、二首と数えず、一例と数えている。
- (8) 魏の贈答詩についての専論に、龜山朗論文「建安詩人による送別の贈答詩について」(『日本中國學會報』第四十一集、一九八九年)、「建安年間後期の曹植の〈贈答詩〉について」(『中國文學報』第四十二冊、一九九〇年)、「劉楨贈答詩論」(『中國文學報』第四十七冊、一九九三年)がある。龜山論文は、個々の詩における内容の詳細な分析に優れ、個々の詩が備え持つ特徴について明解に指摘されている。
- (9) 拙論「西晉「五言贈答詩」創作時期考」(『言語と文化』第四號、愛知大學語學教育研究室、二〇〇〇年)を参照。
- (10) 拙論「昔爲倡家女 今爲蕩子婦 考—漢代の「倡家」の實態に即して—」(『中國詩文論叢』第十五集、中國詩文研究會、一九九六年)を参照。
- (11) 【注】(10) 所掲の拙論を参照。
- 魏における五言詩流行の要因について(矢田)
- (12) 曹丕の五言の齊言の樂府「善哉行二首」其二にも、齊の地方の倡家が舞を舞う様子が詠われている。
- 齊倡發東舞 齊の倡は東の舞を發し
秦箏奏西音 秦の箏は西の音を奏す
- なお、狩野雄論文「有名と無名のあいだ—後漢樂府の一面—」(『相模國文』第三十二號、二〇〇五年)は、曹丕と曹植の主として樂府作品に「齊」という地名が多く詠われていることと、母親の卞氏が曹操と巡り逢うまでの間、主として活動していた地域が齊であったことに着目し、「卞氏の興入れを機縁として多くの齊の樂人が曹操の幕下に入って地位を得てゆき、盛んに齊の樂が演奏され歌唱されるようになっていった」可能性を指摘している。
- (13) 渡邊義浩著『三國政權の構造と「名士」』(汲古書院、二〇〇四年)第四章「曹魏政權論」第三節「文學」の宣揚を参照。
- (14) 「五官將文學」に、いわゆる「建安七子」の中では、徐幹と應瑒が就任している(『三國志』卷二十一「魏書・王粲傳」)。また伊藤正文論文「劉楨傳論」(『建安詩人とその傳統』創文社、二〇〇二年、所收)によれば、劉楨もまたこの官職に就いていた可能性が高いという。
- (15) 王粲・劉楨・阮瑀・應瑒には、曹丕主催の宴席で作られた「公讌詩」と題する五言詩がある。政策的な意圖はともかく、これらの詩が酒宴の主催者である曹丕の要請によって作られ

中國詩文論叢 第二十五集

たものであることは、以下に挙げる『初學記』の記述の例から見ても、ほぼ間違いないであろう。『初學記』卷十「儲宮部・皇太子」の「西池 東閣」の項に以下のようにある。

魏文帝集曰、爲太子時、北園及東閣講堂、竝賦詩。命王粲・劉楨・阮瑀・應瑒等同作。

〔魏の文帝の集に曰はく、太子たりし時、北園及び東閣の講堂にて、竝びに詩を賦す。王粲・劉楨・阮瑀・應瑒等に命じて同に作らしむ、と。〕

- (16) ちなみに魏の嘉平六年（二五四）、皇帝であった曹芳は、毎日「倡優」を引き入れ、政治を怠ったことを理由に挙げられ、司馬師によって帝位を廢されている。『三國志』卷四「魏書・三少帝紀」に以下のようにある。

秋九月、大將軍司馬景王將謀廢帝、以聞皇太后。甲戌、太后令曰、「皇帝芳春秋已長、不親萬機、耽淫內寵、沈漫女德、日延倡優、縱其醜譴、……以避皇位。」

〔秋九月、大將軍司馬景王 將に帝を廢せんことを謀らんとし、以つて皇太后に聞す。甲戌、太后 令して曰はく、「皇帝の芳は 春秋 已に長ずるも、萬機を親らせず、內寵に耽淫し、女德に沈漫し、日々倡優を延ぎ、其の醜譴を縱にす、……以つて皇位を避く。」と。〕

また、倡家出身の卞氏は、常に質素儉約に努めていたという。王沈の『魏書』（『三國志』卷五「魏書・后妃傳」の裴松之注、所引）に見える卞氏自身の言葉に以下のように言う。

吾事武帝四五十年、行儉日久、不能自變爲奢。

〔吾れ武帝に事へて四五十年、儉を行ふこと日に久し、自ら變じて奢を爲すこと能はず。〕

もちろん卞氏自身の人柄によるものであろうが、卞氏は倡家の出身であるがゆえに、儒教を信奉する名士層から見れば、批判の対象となりやすい立場にあったと考えられる。名士層の批判をかわすためにも、卞氏は自らの行動には常に慎重を期する必要があるたのではないだろうか。ちなみに、卞氏もまた、孔子の要請により誅殺された倡優と同様、齊の出身であった。

- (17) 西晉に滅ぼされた呉の出身の陸雲は、兄の陸機に寄せた書簡（「與平原書」其三）の中で、「四言五言非所長（四言・五言は長ずる所に非ず）」と言う。陸雲のこの發言は、三國期における呉の詩作状況をそのまま反映しているのではないかと思われる。

- (18) 薛綜「嘲蜀使張奉二首」（四言）、張純「賦席」（四言）、張儼「賦犬」（四言）、朱異「賦弩」（四言）、諸葛恪「與費禕」（四言）、華覈「與薛瑩詩」（五言）、周昭「與孫奇詩」（四言）、孫皓「爾汝歌」（五言）。

- (19) 阮瑀は建安十七年（二一〇）に、王粲・徐幹・陳琳・應瑒・劉楨は、いずれも建安二十二年（二一七）に亡くなる（『三國志』卷二十一「魏書・王粲傳」）。

- (20) 【注】(13)に同じ。

(21) 「天下爲公〔天下を公と爲す〕」という『禮記』禮運を典據とする儒教の論理によって、後漢の禪讓を受けて魏を建國した曹丕は、例えば即位後ただちに親族や外戚の政治への參與を禁止したり、孔子廟祭祀の復興により儒教の尊重を象徴的に示したりするなど、儒教に基づく「公」の政治を推進し、正統性を常に顕在化する必要に迫られることになった（渡邊義浩氏の【注】（13）前掲書、第四章「曹魏政權論」第四節「公」と「私」を参照）。

魏における五言詩流行の要因について（矢田）